

昨年10月、鹿児島県鹿屋市に、24時間救急にも対応する心臓病専門施設「鹿屋ハートセンター」（循環器科・内科/19床）を開業した新井英和氏。勤務医時代には、福岡徳洲会病院（福岡県春日市）の副院長や大隅鹿屋病院（鹿児島県鹿屋市）の総長などを歴任した。徳洲会グループの専務理事の1人として、組織のトップにまで上り詰めた新井氏だったが、「崩壊の危機に瀕している地方医療を見殺しにはできない」という思いを胸に、九州最南端の医療過疎地・大隅半島での開業を決意。52歳で再スタートを切った。

「言ってみれば一部上場企業の取締役が、たった1人で小さな会社を始めるようなものでしたから、清水の舞台から飛び降りる感覚に近いものがありました。一方で、私がこの鹿屋の地で踏ん張ることで、日本の医療が抱えている根深い問題を解決する1つのモデルケースを提示できるのではないかといい、密かな気負いもありました」

もともと新井氏は大阪出身。奈良県立医科大学を卒業後、34歳の時に湘南鎌倉総合病院に赴任するまで、関西圏から出たことはなかったという。そんな生粋の関西人である新井氏が、縁もゆかりもない鹿屋の地に根を下ろすことになったきっかけは、いくつかの偶然によるものだった。

上を見るのをやめた時 裾野の大切さが見えてきた

その後、新井氏は対馬の病院と福岡徳洲会病院をデジタル回線で結び、テレビ電話を使って現地の医師にアドバイスを与えるという遠隔手術システムを確立した。00年には、福岡で築いた

医療過疎地の崩壊を 黙って見ていたくない

新井 英和

HIDEKAZU
ARAI

湘南鎌倉病院の立ち上げにも深く関わり、カテーテルの手術件数を年間600件超にした新井氏。94年には福岡徳洲会病院に赴任し、年間約80件だった同手術件数を、わずか3年足らずで8倍近くにまで増やした。そんな当時の自身を評して「上ばかりを見ていた野心がだった」と忸怩たる表情で振り返る新井氏だが、その考え方を一変させたのは、長崎県の離島・対馬との出会いだったという。

97年当時、福岡徳洲会病院での心筋梗塞による死亡率は3・9%ほどだったのに対し、対馬での死亡率は15・8%と実に4倍以上にのぼっていた。医療設備が整っていれば助かるはずの命が、なすすべもなく失われてゆく過酷な現実、医療過疎地は直面している。その悲劇を少しでも減らすために自分ができることは何か——その想いは、やがて新井氏を開業へと突き動かしていくことになる。

すべてを後人に譲り、自ら志願して、九州でも指折りのへき地と言われる大隅半島にある大隅鹿屋病院へ転属することを決めた。

「私は、それまで学会の頂点ばかりを目指して、いちばん大切な裾野を無視してきたことに気づきました。誰かが裾野を広げる努力をしなければ、日本の医療全体の面積は広がっていかない。当時、鹿屋市は鹿児島県内でも2番目（現在は3番目）の人口を擁しながら、市内にPCI（冠動脈インターベンション治療）を行える施設はなく、心臓疾患の救急患者は錦江湾を渡って鹿児島市内まで搬送しなければなら

ないという、まさに『陸の孤島』でした。全国的に見ても、県内で人口第2位の市がそのような状況で放置されている例はほかになく、このまま放っておけないと思いました」

大隅鹿屋病院に赴任すると同時に循環器科を立ち上げた新井氏。間もなく院長に就任すると、3億円の赤字を5億円の黒字に転換させたことが評価され、総長に推されると同時にグループの専務理事に抜擢されるなど、とんとん拍子に出世の階段を上り詰めていった。大隅半島に心臓病治療の火を灯すという当初の目的だけでなく、大隅鹿屋病院の立て直しを達成したこと、

開業医の 横顔

face.5

医療設備



▲ME1人、レントゲン技師2人が手術室に入り、検査技師2人が手術室外から院長を支える。手術中の映像は、控え室にいる家族がリアルタイムに見ることができる。

▼取材時には16時から診断カテーテル検査2件、冠動脈形成術2件、ペースメーカー植え込み術1件の計5件が2時間半かけて行われた。



▲冠動脈対応マルチスライスCTを装着。月100件以上稼働している。デジタル超音波装置・心電図・血圧脈波検査装置、X線装置は画像ネットワークで繋がっている。インターネット利用型のセコム電子カルテを採用し、院内ネットワークを構築している。

また、最大のネックになるかと思われたスタッフの確保だったが、ハローワークを活用し、経験者ゼロの状態でも開業することもいとわなかった。

「循環器に特化した治療を経験しているスタッフはいませんが、才能は平等。開業してしまえば何とかなるものですし、トレーニングを積んだスタッフとでなければタッグを組めないというのであれば、それは私自身の逃げでしかないと思いました」

かくして、開業から間もなく10ヵ月目を迎える鹿屋ハートセンター。平均年齢70歳以上の患者は口コミで順調に増え続け、今や半径50km圏内から、毎月2000人を超える初診患者が訪れている。

「新聞に折り込みチラシを入れたのは、開業直前の1回だけ。開業時に地方紙の記事で取り上げてくれましたが、やはり今の私を支えているのは、前職時代に、鹿屋周辺にある100カ所以上の公民館をすべて回り、のべ5万人を超えるお年寄りに直接名刺を配ったことだと思います」

経営も至って順調に推移しており、損益分岐点と言われる月間カテーテル手術件数12件は毎月軽くクリア。累積件数は、開院から8ヵ月で120件を超えた。開業翌月から早くも黒字に転じ、ここ数ヵ月の経常利益率は30%にも迫る勢いだという。

「この手のクリニックの先駆けであり、成功を収めているケースとして、よく『豊橋ハートセンター』の例が上げられますが、鹿屋市との比較で見ただけで総人口では豊橋市の足下にも及ばないものの、1病院当たりの65歳以上の人口に限ればむしろ鹿屋市のほうが多いというデータがあります。そういった意味では、長らく循環器科不毛の地と呼ばれてきたこの地にも、豊橋市と同程度の潜在的需要があることは十分に予想できましたし、後は、いかにムダを省いて初期投資を低く抑えられるかが成功のカギだと思っていました。この地で長く頑張り続けるためには、ハイレベルでローコストな施設が不可欠だと考えたのです」

終わりなき闘い

5年10月、鹿屋の心臓病医療の質を守り続ける覚悟を決めた新井氏は、徳洲会と決別。念入りなマーケティングを行う一方、経営者として本格的な開業準備に着手した。

「最初被災地の人が口にしたのが『いつまでも見続けることができない夢は絶対に持ち込まないでくれ』という言葉でした。つまり、私たちが帰国した後に現地の人たちの力だけでは維持できない、その場限りの援助なら最初からないほうがまだという切実な気持ちから発せられた言葉です。それを聞いた時、私が灯した鹿屋の循環器診療の火を守る責任から逃れられないと思いました」

延床面積623坪（鉄筋3階建て）のクリニックは、徹底したIT化と院内感染対策にこだわり、カテーテル手術の設備や冠動脈対応マルチスライスCTを完備している。その上、看護師14人、看護助手2人、事務職員6人、生理検査技師2人、放射線技師2人を全員常勤で雇用するなど、クリニック離れした陣容を誇る鹿屋ハートセンターだが、開業資金は5億円ほど（全額銀行からの融資）に抑え込まれているというから驚く。

「この建物を見ていただければわかると思うのですが、とてもシンプルな構造をしています。徹底した院内感染対策とIT化に取り組んだ結果、アメニティの質も向上しました。見た目から施設をつくるのではなく、『本来、医療機関が備えておくべき機能』に着目したことで、機能性の高い設備が、坪単価52万円で実現できたのです」



鹿屋ハートセンター

- 院長：新井 英和（あらいひでかず）氏
- 大隅鹿屋病院院長を経て、06年10月心臓病専門医療施設「鹿屋ハートセンター」開院。
- 循環器学会認定循環器専門医、心臓病学会特別正会員、内科学会認定医、インターベンション学会指導医、カテーテル治療学会指導医
- 標榜科目：循環器科、内科
- ベッド数：19床（平均在院日数は6日）
- 職員数：総勢26人（医師1人、看護師14人、看護助手2人、事務職員6人、生理検査技師2人、ME1人）
- 医療機器：X線一般撮影装置・デジタルイメージャー、冠動脈対応マルチスライスCT、心血管超音波診断装置、心電図・血圧脈波検査装置、肺機能検査装置、画像ネットワークシステム、集中治療監視装置、IABP・人口呼吸器
- 所在地：〒893-0013 鹿児島県鹿屋市礼元2-3746-8
- TEL：0994-41-8100
- URL：http://www.kanoya-heart.com
- E-mail：araihid@gol.com

「鹿屋のような医療過疎地でも、『その場所にそのクリニックは本当に必要なのか』という、マーケティング分析と理念と準備さえしっかりしていれば、医療モデルが成り立つことを証明する存在でありたいと思っています。前例が示せば、医療過疎地での開業を考える人の輪が広がっていくかも知れない。そのために、蓄積したノウハウや事業計画、経営に関する統計資料など、すべて公開することに何の抵抗感もありません。見学も大歓迎です。開業医の分かれ道はプロの経営者になる自覚をどれだけ抱けるかどうか。ご存じの通り、開業は安易な気持ちで始められることではありません。井勘定など論外ですし、多大なリスクを負います。私は、コンサルタントにはまったく頼らず、自分で開設趣意書や事業計画を作

成しました。銀行もそうした姿勢を好意的に評価してくれ、取引の実績がなかったにもかかわらず、満足できる金利を提示してくれました」

経営者としても手腕を振るう新井氏だが、根底にあるのは、崩壊の一途をたどる地方医療を救い、地方から医療を変えていく「鹿屋モデル」を発信したいという情熱にほかならない。その思いの深さは、クリニックの名称にも表れている。新井氏が「新井クリニック」ではなく、あえて「鹿屋ハートセンター」という個人色を廃した名称にこだわったのは、自分が現役を引退した後も鹿屋に希望の火を灯し続けて欲しいという、切なる願いを託してのことだった。新井氏の終わりなき闘いはまだ始まったばかりなのである。

文・七瀬 恭一郎／撮影・柴谷 浩也

院内感染対策



▲非常灯に積もる埃が目立つように、アクリル板が屋根のように設置されている。

▲防埃・低結露のために、病室では二重窓の中にブラインドが内蔵されている。



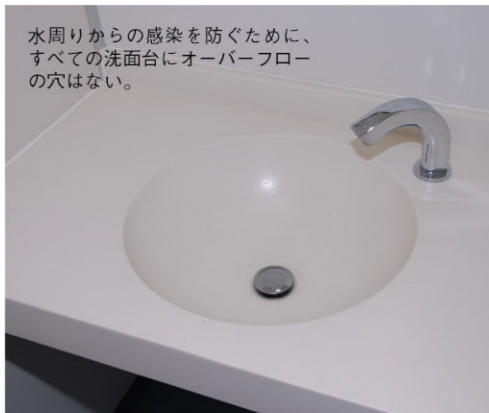
▼掃除用モップも、同じものを繰り返し使うのではなく、オフローション方式（汚れたモップ先を取り外し、清潔なものに交換して拭く方法）を採用するという徹底ぶりだ。



▲一列に並んだゴミ箱も、キャスターを取り付けることで、従業員が掃除しやすくなっている。



▲部屋のすみずみまで清掃できるように、床材を立ち上げて施工。



水周りからの感染を防ぐために、すべての洗面台にオーバーフローの穴はない。